

大津波で「九死に一生」を得た避難所体験

3月11日(金)は、母親(90歳)の週2回目の膝と腰のリハビリの日に当たり、松島病院に何時ものとうり車で通院し、治療を受けて10時半ごろ帰宅した。

くつろいでテレビを見始めたところ、地上デジタルに切り替えたばかりなのに、どのチャンネルも画面にノイズが入り見られない。衛星デジタル放送は問題ないので、自分が取り換えたアンテナの向きが変わったか、繋いだ同軸の接触が悪くなったのかと、女房の手をかりて屋根に昇り修理に取りかかる。12時半ごろ一応画面が安定したので、昼食をとり、しばらくくつろいだ。

今思えば、このテレビ画面の乱れが悪夢の大地震の始まりではないかと思われる。

14時46分、ぐらぐらと大きく揺れ、ドドン、ガシャン、キーン、やっと椅子から立ち上がり、窓を開ける。外に出ようとする女房を制し、柱につかまり、長く続いた揺れが収まるのを待つのが精一杯。これまでになく永い揺れに恐怖を感じる。電気が切れ、食器棚などの家具は止めていたので倒れなかったが、食器や戸棚の物などがリビング中に散乱、めちゃくちゃになっている。防災無線が「住民の避難！」を何時ものように伝えている。

家族3人怪我なし、女房に避難準備指示、隣のおばちゃんの安否確認に走る。

おばちゃんは無事だったので、避難をするよう話し、前の家のおばちゃんの家に行き声をかけるが玄関が締まっており留守。

その足で、後ろの運河を見に行き、水が引いてる事を確認、「これは津波が来るな」と思う。

家に戻ると女房から「大津波警報が出た、早く避難しなければ」と急き立てられ、ラジオ、財布、免許証、携帯をポケットに入れ、福知山の妹からの安否携帯に答え、車を出して母親と女房を載せて野蒜小学校に向かう。途中、野蒜始まって以来の大渋滞に会いなかなか進まず、避難所に着くと、小学校の校庭は車で一杯。体育館前に到達して入ろうとすると混雑が激しく「介護施設の人を優先してくれ」など、「耐震が足りないから校舎側がいいよ」などの話が飛び交い、避難所についた安心感も手早い6~8分、躊躇している内に、消防団の人が「津波がきた早く逃げろ」と叫びながら、駆けてきた。

この時点で、母親は、足が悪いので車の中、女房は体育館の扉口、小生は、車と女房との間で体育館玄関階段、このままだと母親は死ぬな、女房は、間違いなく体育館に入れると思い、車に走りエンジンをかけて、体育館前より10m程前を出した処で黒い津波に飲み込まれる。

幸いにして2人を乗せたマーチは浮いたので、ぐるぐる回りながらしばらく浮遊して、校舎の西口である1階の日差しのある校舎の側壁の部分で車や、瓦礫の上に乗上げる形で止まった。



2人を救った雪を被ったマーチ、
日差しから写す

その津波の高さは、3メートルはあった。

車は、水平に止まったので、自ら運転席のドアを開けて外に出て、母親を出しにかかったが、無抵抗の母親は重くて出せず、近くて助かった若い人に手伝ってもらい、フロント部分が沈み込んで逆さまになりつつある後部座席から母親を引き出す。

校舎の日差し部分に人がいたので助けを求め、最初はカーテンを繋ぎ合わせた紐で母親を引き上げてもらおうとしたがうまくいかず、校舎備え付けのホースを引いてきて先を輪にした物で母親を釣り上げてもらって、助かる。

この場所には、我々のほかに、介護施設の車にお爺さんとお婆さん5人、少し離れたところに後藤さん親子とお婆さんの3人、加藤さんの奥さんが車の外で水に浸かっている。もう一組の4台の車が流され漂着、先の若い人と介護士の女性も一緒になって車から7人を引出し、日差しからホースの輪で引き上げてもらい2階のコンピューター室に収容され助かることができました。最後に若者と小生が、戸板を立て掛け自力で昇りましたが、若者は、軽々と小生は、手を借りてやっと日差しに昇るありさま体力のなさを実感する。

助け上げられた母親に話しかけ、無事を確認することができたのが束の間で、校舎の裏側に数十台の避難車で打寄せられた人達が助けを求めていたので、その救助に木村さんはじめ7人程たずさわっていたので、救助に加わり、肋骨を骨折した若い女性、左手の指2本を第一関節から失った加藤区長さんはじめ数人を消防ホースや椅子・机等を使い2階の女子トイレの窓から夢中で引き入れて、本部脇の教室に連れて行き、擁護の先生に引き渡す。

本部にいた教頭先生、救急車を呼びたいが携帯が通じない、校舎東側が道路に面しているので、生徒たちの安否を気遣って集まって来た父兄たちが子供の名前を叫んでいる。その人たちの中に、教頭先生の顔見知りがあったので、重病人がいるので救急車と市役所に連絡をお願いします。（一時避難所は孤立した。）

窓から体を乗り出して、小生の携帯が電波をとらえ119番、何とか通じた一回の電話で、野蒜小学校避難所に重病人、救急車の要請と、体育館で死人が出ている様子を伝える。オペレータの人は「このような状態なので手配がつくかわからないが、そちらに回します。」との返事。

体育館の玄関で別れた女房の安否が気がかりで校舎2階の窓越しに30M離れた体育館を見ると、体育館前は、車と瓦礫の山で、津波は引いていない状況。外観は2階の窓が壊れているところがあるが大丈夫そうだが、中の様子はわからない。隣組の土佐さんも同じように体育館前で、奥さんと別れ離れになっており、現状では、見に行けずお互い心配が募るばかりだ。





12日朝、校舎西口状態

19時ごろ市職員や市役所の要請で、集まった建設会社社員の一団が避難所本部に到着する。

津波が引いたのが20時ごろで校舎側から体育館に避難している子供たちの父兄と建設会社の社員20人近くが中心に2回目のアタックを開始、ガソリンの揮発臭の中、まだ残っている海水と瓦礫と車を掻き分けて、道を作り体育館にたどり着き安否を確認し、順次幼児妊婦から順番に送り出す。途中多くの人が立会、リレー方式で避難させた数は、約150人位で校舎に収容し終えたのが24時過ぎになりました。

心配していた女房は、中頃に元気な顔をもせたのでほんとに良かった。

「おとうさん」と一言発したのみでしたが、私も携帯を懐中電灯代わりに使い足元を照らして、迎え入れるのが精一杯でした。特にうれしかったです。

避難の人々は、ずぶ濡れのひと、靴が脱げて何もはいていない人、片方だけ靴の人、スリッパの人、ちぐはぐな人、怪我している人、担架で運ばれる人、老若男女と子供たち、泣きながら背を抱えられて歩く人、大丈夫と声をかけられ一人踏ん張り歩く人、みんなで頑張りました。体育館から校舎に移動した校舎階段と通路には、先生方が理科室から調達した粗製のアルコールランプの明かりで照らされ、それぞれの教室に落ち着くことができました。

しかし、約40人が泥だらけの体育館の床に冷たい体を横たえていたことを翌日知ることになりました。後で女房に聞いた話ですが、体育館の様子は、「津波が来たから上に逃げる」との声で、女房は、体育館の2階ギャラリ―席に駆け上って、太い鉄骨柱にしがみついたとのこと。1階にいた多くの人々は津波に呑み込まれ渦を巻きながら流され、ギャラリ―席に多くの人が助け上げられたが、力尽きる人も多かったとのこと。

地獄絵の光景であったのかー

コンピューター室に落ち着いた母親と小生はじめ20数名の人は、それぞれ海水に浸かり着替えもなく毛布もなく、カーテンを集めて包まる状況でした。13時ごろから降り出した雨交じりの雪で、その晩は特に寒さが厳しく一睡もできませんでした。介護施設の高齢の方が低体温症のためか朝方2名無くなっていることが分かり、残念で仕方がありません。隣組の土佐さんの奥さんは、担架でコンピューター室に運ばれ横たわっているところを旦那さんが見つけ、ペースメーカーをつけていた身体で相当弱っていたので、救急車で運ばれて行きました。

母親は膝が悪いため椅子に腰かけたままで一晩を過ごす、夜はトイレが近いので携帯の明かりを頼りに3回も連れて行くことになる、水の出ないトイレは、すぐに汚くなるがどうしようもない。

貞観（じょうがん）11年5月26日（869年）大津波以上の津波で、「九死に1生」を得た。人生最大の体験をして開けた朝、校庭で破材を集め焚火をしている人の輪に入り、

あたたか火の暖かさが、冷え切った体を温め、生きている喜びがふつふつと湧いてきて、生かして貰った思いを実感しました。

自衛隊のブルドーザーが唸りを上げ始めました。この時点では我が家と野蒜がどうなっているか分かりませんでした。後で見た我が家と野蒜地区の携帯写真を何点か載せますが、多くの方が亡くなりました。隣組17軒中死亡9人、全壊17軒。野蒜小学校体育館及び避難所周辺で死亡約120人。

野蒜海岸に200体の死体が流れ着いたと12日のラジオから聞える。新町地区、亀岡地区・東名新場元場・洲崎地区が全滅状態。

永い避難所生活が始まりました。



土台のみの我家跡



我家脇の亀岡橋から遠く海岸線が見える

多くの皆様に心配をかけました安否情報ですが15日に、女房が大阪から駆けつけたボランティアの方の車で松島病院に薬をもらいに行ったときに、携帯が通じるまで移動して貰い、埼玉の娘に連絡を取って貰ったのがきっかけで、グーグルの安否情報から依岡さんはじめ、多くの皆様に佐々木家族が生きることが伝わっていったとのこと。

津波後の小生の携帯は、21日にドコモの移動中継車が配備されてからやっと通じるようになりました。



亀岡橋の東名運河に浮かぶ吉田さんの家



被災した簡保の宿



亀岡橋に集まった屋根と残骸



野蒜の被害状況は、マスコミや YOU TUBE の報道で広く伝えられていますので、今回は、何もかも押し流した大津波の前で、何もできなかった家族の行動と九死に一生の命を戴いた私と、避難所の一面について書きましたがそれらは、多くの皆様の助けによるお蔭です。また多くの神様に助けてもらったと感じます。心から深く感謝を申し上げますとともに、安否を気使い電話やメールをいただき安否を心配いただいた多くの皆様に深く感謝を申し上げます。

又その後の出来事の 1 部については、女房が時事通信の取材に答えておりそれが記事になっておりますので、別途報告いたします。

以上が小生の体験した震災第 1 報とさせていただきます。ありがとうございました。これからは、家族 3 人一致団結、ささやかな家を再建し、風光明媚な・自然豊かな野蒜が再建できればと念じております。

頑張ります ー

東松島市野蒜字南赤崎 74-3 佐々木勝久

(以下は時事通信記者が佐々木さんの娘さんと奥様に取材して、発信された記事です。 写真は別途佐々木さん撮影のものです。)

「父が緊急搬送された。でも、ガソリンがなくて会いに行けない」。

宮城県石巻市で勤務する公務員の女性（31）は、東日本大震災で、周囲が火の海になる中、高台にある職場に取り残された。同県東松島市の実家は津波で流失。両親は巻き込まれながらも救出されたが、避難所でまとめ役をしていた父（65）は15日に倒れた。震災から18日で1週間、まだ会えない家族を思い、不安な日々が続く。

地震が起きた11日、女性は職場にいた。「地震だ」。急いで避難所に向かうと、津波から逃れて来た人たちであふれていた。職場に戻り、外部との連絡が取れないまま4日間を同僚と過ごした。

焦げ臭い市内に出ると、がれきで道は消失。営業していないコンビニや赤ちゃん用品店はガラスが割られ、商品が略奪されていた。

5日目の15日、仙台市から様子を見に来た人の車で、ようやく同市の自宅に戻ることができた。関東に住む姉に連絡し、はじめて両親が生きていると知った。

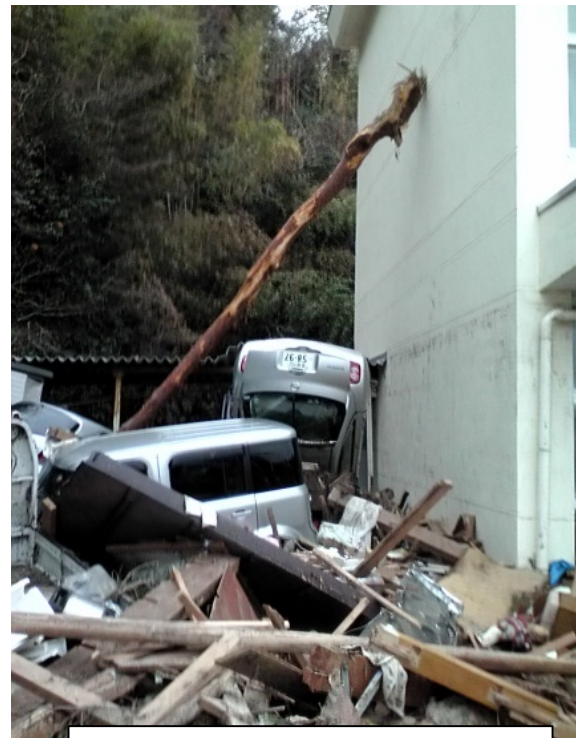
この間、両親も必死だった。地震発生直後、「津波が来る」と声が飛び交った。「渋滞する車はやめとけ」と近所の人に言われたが、歩けない祖母（90）を車に乗せ、父は走りだした。先に荷物を持って出た母（62）を途中で乗せ、避難所の小学校の体育館へ。母がまず列に並び、父が祖母と車から降りようとしたとき、津波が迫った。

「お父さん、早く」。母が叫んだときに、車は津波にさらわれた。母は体育館のフェンスにしがみついたが、中に避難していた約40人がぐるぐると巻き込まれた。「体育館に入っていたら、助からなかった」。父と祖母の車は木や他の車に引っかかり、自力で出られなかった祖母は周りにいた人に引っ張り出された。

津波が去った体育館には、灯油も食べ物もなかったが、泥だらけのまま耐え、15日に別の避難所に移動。この日、父はトイレで胃から血を出し、倒れた。「父はリーダーのように避難所でまとめ役をしていたという。疲れがたまっただろう」。

一刻も早く父に会いたいが、ガソリンは緊急車両への供給さえままならない状態。

会えないまま、女性は無事を願っている。(了)



津波が引いた後の佐々木さんが乗っていた車（マーチ）（佐々木さん撮影）